米原歴史街道

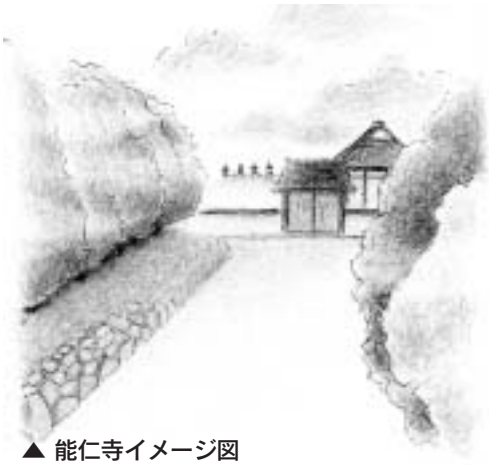
米原市の歴史・文化財を歩く㊼

守護大名の菩提寺発見

―能仁寺遺跡（清滝）の発掘調査①―

能仁寺遺跡は、京極氏の歴代当主の墓所がある清瀧寺徳源院の南にある寺院跡です。滋賀県教育委員会による発掘調査で、京極氏の信仰と文化を知るうえで貴重な成果が得られましたので、二回に分けて紹介します。

遺跡の上部では、中世のお墓が2基発見され、古瀬戸焼の壺を用いた骨壺が出土しました。下段で見つかった仏堂背後にも石で囲った高まりに五輪塔が五基据えられ、その部品が付近に散乱していました。このほかにも、墓地を厚くおおう土砂からは二〇〇点以上の墓石の部品が出土しています。なかには「貞治(三)年七月□日」（一三六三）の記年銘があり、南北朝時代から墓地として使用されていたことがうかがえます。



▲ 能仁寺イメージ図
出典：(財)滋賀県文化財保護協会

発掘で出土した能仁寺の中心部と考えられる仏堂の基壇（建物が建つ高まり）は、南北約一二．五メートル、東西は不明瞭ですが約一四メートルの規模で、南辺は自然石による化粧積み、北辺は石組み溝で区画されています。北辺の溝にそって四つの柱の基礎石とこれらをつなぐ地覆石が残されていて、仏堂の跡と考えられます。

さらに、基壇の東辺を区画する段差の東側約三メートルに山門跡らしい遺構がみつかりました。小石を長さ一．五メートル、幅〇．五メートルほどの帯状に積み上げたもので、南北二ヵ所に分かれており、土塀の残骸と考えられます。このうち南側のものには礎石とみられる石が設置されています。礎石は参道に付設された石垣の延長上にあることや、基壇と参道が接する場所にあることから、山門の遺構と思われます。門の間口は三メートル程度で、二本の門柱を土塀で支えていたようです。

山門跡から東方へはゆるい傾斜で降っていきます。ここには山門の間口とほぼ同じ幅で、一七メートルにわたって砂混じり粘土が貼られており、この南側には長さ一四メートル以上、高さ一．五メートルの大規模な石垣が築かれています。参道は中心的仏堂があったと考えられる基壇と方位が一致し、山門跡を介してつながることから、本堂へ通じる参道と考えられます。

寺院の中心的仏堂は保存状態が良くありませんでしたが、方形基壇とこれにつながる山門跡や参道が方位をそろえて配置されていること、出土遺物にすり鉢などの日常雑器が少なく、良質な焼き物がめだつこと、背後に墓地があることなど、ここが寺院であることを示しています。伝えられる地名「能仁寺」の遺構と考えていいようです。能仁寺の名は、寺伝の第七代京極高詮の戒名「能仁寺殿乾嶺浄高大居士」に見ることができます。高詮は、応永八年（一四〇一）に亡くなっており、菩提寺の能仁寺がこの前後に創建されたとすると、遺跡から出土した土器類の年代とも矛盾しません。

中世の守護大名の墓所のようすは、近世に整備・移築したものを除いてほとんど知られていません。能仁寺遺跡でも墓地の遺構は明確ではありませんが、守護大名の菩提寺に関連する遺構を明らかにした点で貴重な発見となりました。

（歴史・文化財保護室）

▲ 参道と石垣（右上が仏堂跡）